

【令和３年度足立区総合教育会議】会議概要

会 議 名	令和３年度足立区総合教育会議		
事 務 局	政策経営部政策経営課		
開 催 年 月 日	令和３年１０月２８日（木）		
開 催 時 間	午後１時１２分 ～ 午後２時３０分		
開 催 場 所	足立区役所南館８階 庁議室		
出 席 者	区長 近藤 弥生	教育長 大山 日出夫	教育委員（教育長職務代理者） 河本 孝美
	教育委員 近藤 俊明	教育委員 小関 朝之	教育委員 早川 貴美子
	鹿浜第一小学校校長 中郡 英一	あすテップ支援員 佐々木 美苗	政策経営部長 勝田 実
	教育指導部長 荒井 広幸	学校運営部長 川口 弘	こども支援センターげんき所長 橋本 太郎
	政策経営課長 伊東 貴志	ＩＣＴ戦略推進担当課長 高橋 皇介	教育政策課長 森 太一
	こども支援センターげんき 支援管理課長 門藤 敦良	こども支援センターげんき 教育相談課長 楠山 慶之	
欠 席 者			
会 議 次 第	別紙のとおり		
資 料	令和３年度 足立区総合教育会議 次第 令和３年度 足立区総合教育会議 出席者名簿 令和３年度 足立区総合教育会議 座席表 説明資料１ ＩＣＴを活用した特別支援教育の取り組み 説明資料２ ＩＣＴを活用した不登校支援 説明資料３ 夏季休業期間中における持ち帰り用端末活用の成果と課題等		
そ の 他			

(審議経過)

○伊東政策経営課長

皆さん、こんにちは。定刻より少し前でございますが、ただいまより令和3年度足立区総合教育会議を開催させていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、政策経営課長の伊東でございます。よろしくお願いいたします。

なお、この総合教育会議でございますが、公開を原則としてございます。会議の記録につきましては、後刻、ホームページで公開させていただきますので、ご了解願います。

また、適宜公開用の写真撮影が入りますので、その点もご了承ください。よろしくお願いいたします。

また、会議中、会議録作成のために皆様の発言を録音させていただきます。発言の際は、お手数ではございますが、お手元のマイクのボタンを押していただき、終わりましたら再度ボタンを押していただきますよう、よろしくお願いいたします。

議事に入ります前に、教育委員の皆様をご紹介します。

河本孝美様でございます。

○河本教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

近藤俊明様。

○近藤教育委員

どうぞよろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

小関朝之様。

○小関教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

早川貴美子様。

○早川教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

よろしくお願いいたします。

また、本日は、本日の議題に沿った現場の様子をご説明いただくために、実際に子どもたちの指導に当たっている方にもご出席いただいておりますので、ご紹介いたします。

鹿浜第一小学校の中郡校長です。

○中郡鹿浜第一小学校校長

こんにちは。よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

あすテップの佐々木支援員です。

○佐々木あすテップ支援員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

次に、お手元に配付いたしております資料の確認をさせていただきます。

まず、本日の次第、出席者名簿、席次表になります。お手元でございますでしょうか。

本日の議題に関係する所管の職員も同席させていただきますので、出席者につきまして、出席者名簿にてご確認いただきますようお願いいたします。

次に、説明資料でございます。説明資料1～3がございます。説明資料1が「ICTを活用した特別支援教育の取り組み」、説明資料2が「ICTを活用した不登校支援」、説明資料3が「夏季休業期間中における持ち帰り用端末活用の成果と課題等」でございます。お手元でございます。

しょうか。

なお、こちらの資料につきましては、説明の際にお席の前のモニターにも投影いたしますので、そちらもご覧いただきますようお願いいたします。

それでは、これより議事に入ります。議事の進行は近藤区長をお願いいたします。

○近藤区長

それでは、進行させていただきます。

今回のテーマは、「ＩＣＴを活用した学校教育、不登校支援、特別支援教育について」とさせていただきます。

ご承知のとおり、コロナ禍で学校現場は大きな影響を受けたわけでございますが、その中で、遅れたとはいいながら、全児童・生徒にタブレットを１人１台の配備が整って、いよいよこれから、どのように活用していくかという重要な局面に入っていくわけでございますので、現在の足立区の状況、現状を皆様方にもつぶさにご理解いただきまして、ご要望ですとかご意見を賜ればと考えております。

１人１台と申し上げましたけれども、例えば教科の先生方に１台ですとか、先生方にはまだ行き届いていない状況、そしてまた Chromebook と Windows が混在して、現場が非常に混乱しているという状況については十二分に承知しております。現在、１２月の予算査定の中で、そうしたところをどのように解消していくかということは、現場の小学校、中学校の校長先生からも強いご要望を頂いておりますので、どのように解消していくかということについて具体的にご紹介したいと思っておりますけれども、まだ査定の最中でございますので、今日のところは、解消の方向で今検討しているところでご理解をお願いしたいと思います。

それでは、早速ですが、まず最初に、特別支援教育、不登校の支援の取組について、実際

の指導の様子を撮影した動画を視聴していただきまして、現場で指導に当たっている方のお話も伺いながら意見交換をさせていただきたいと思っております。

それではまず、こども支援センターげんき支援管理課長と鹿浜第一小学校の中郡校長から、「ＩＣＴを活用した特別支援教育の取り組み」についてのご説明をお願いしたいと思います。

○門藤こども支援センターげんき支援管理課長

皆さん、こんにちは。支援管理課長、門藤でございます。私からは、ＩＣＴ活用計画の概要について説明させていただきます。

令和元年度に、特別支援教育におけるＩＣＴの活用を検討するため、作業部会を立ち上げました。令和２年度から、特別支援学級と特別支援教室１０校の先生方で、ＩＣＴを活用した授業実践を実施し、その効果について検証・分析を行いました。そこから得られた成果や課題を参考に、ＩＣＴを活用した新たな特別支援教育の方向性を検討し、ＩＣＴ活用計画を策定いたしました。

ＩＣＴ活用計画の方向性として、学習支援、教師・学校支援、家庭支援の３つを柱に掲げ、児童・生徒の個に応じた支援を行ってまいります。

まず、学習支援として、個々の学力に応じた学習支援と、発達特性に応じた学習支援を行ってまいります。

また、教師・学校支援として、オンライン相談により、児童・生徒の特性に応じた具体的な指導法について、教師を支援してまいります。

さらに、家庭支援として、支援プログラム等に参加できない保護者に対して、動画配信による支援、オンラインによる発達相談も始めてまいります。

続きまして、具体的な実践につきましては、鹿浜第一小学校、中郡校長先生より報告させていただきます。

○中郡鹿浜第一小学校校長

失礼いたします。鹿浜第一小学校、中郡でございます。私からは、学校におけるICTの取組についてご説明させていただきます。

特別支援学級の知的障がいの児童にとりまして、タブレットを有効活用するということは当初難しいと考えられていたところもございます。しかしながら、実際に導入してみると、個別の学習にとっても役に立つということが分かりました。

特に、読んだり書いたりすることを苦手としている児童は、タブレットの活用によって、音声によるアシストや、キーボードに文字を入力することによって課題をクリアすることが可能です。また、個々の学習状況に応じて、eライブラリなどによるドリル学習もできます。

こちらは学校における具体的な取組場面です。これはジャストスマイルというソフトを活用して上級生に手紙を書いている場面です。自分の好みのデザインを選択して、自分の名前と簡単なメッセージを打ち込みます。手で書くのが苦手、絵が苦手な児童も、好きなデザインを選択し文字を打ち込むだけなので、容易に活動することができます。

では、ここで、実際の授業の場面を動画でご覧いただきたいと思います。

〔動画開始〕

これは小学校の特別支援教室、コミュニケーションの教室での授業場面です。ビジョントレーニングといいまして、視覚と認知能力を高める学習をしています。このように書いて行う活動がこれまで中心でしたが、書いているうちに集中力がだんだん切れてくる、なくなってくる子どもがおります。

これをタブレットに替えて取り組ませると、書く負担のない分、巧みに数字をタッチし、いつの間にか集中して取り組むようになります。

次に、中学校の特別支援学級知的障がいの体育の授業場面をご覧ください。画面の真ん中の生徒

に注目してください。これはサーブの練習です。先生は左足を前に出すようにと言っているのですが、この生徒は右足を前に出しています。そして、サーブするときの足を間違えた生徒に、先生が動画で説明しています。このように、自分の姿を動画で直接見ることによって、課題がどこにあるかを容易に把握することができるようになります。

次は、チームでボールパスが何回続くかということに挑戦しています。チームで個々の課題を把握するために動画撮影し、どうしたら継続できるかを考えさせるきっかけをつくります。今、失敗したので、このように先生の周りに集まっています。

続きまして、中学校、技術科の授業の場面です。まず、先生が本時の授業のめあてを提示し、何を学習するのかを明確にしています。これはこれまでも見られた黒板を使つての授業風景でございます。次に、作業工程を大型モニターに提示しています。これまでの紙ベースのもので説明するよりも効率的、かつ理解しやすいものになっています。

この後、実物投影機に切り替えます。実物投影機で先生の作業を実際に投影しているので、生徒は先生の指示どおりの作業が可能となってきます。

このように、タブレットにはカメラ機能もございますけれども、実際の手元を投影するには、このような書画カメラ、実物投影機と呼ばれるものが大変有効になってきます。現場の先生は臨機応変にICT機器を使い分けることも重要なキーポイントとなってきます。このように、手元を実際に見せる、大きく投影して細かく説明する手法は、発達的に課題のある生徒におきましては、非常に有効であると考えられます。

これが、ダイナモチューブのラジオを作る前段階の作業工程の説明でございました。

〔動画終了〕

最後に、今後の課題でございます。大きく3点でございます。

教員のスキル向上につきましては、実際の現場でも教員によって温度差があるのは事実です。これをいかに解消していくかということが重要になってくると考えられます。

また、教員の負担軽減については、スキル向上と表裏一体した問題となっています。

最後に、環境整備についてですが、こちらは、数多くある教材アプリからどのようなものを選択していくかということが課題となります。

以上で私からの説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○近藤区長

ありがとうございます。最後に課題にありました、教職員のスキルの向上をどのように行っていくかですとか、環境の整備をどうするかというようなことについては、後の質疑の中で伺っていくということでよろしいですか。

○門藤子ども支援センターげんき支援管理課長
はい、結構です。

○近藤区長

では、そのようにさせていただきます。

続きまして、子ども支援センターげんきの教育相談課長と、あすテップの佐々木支援員から、「ICTを活用した不登校支援」についてご説明させていただきます。

○楠山子ども支援センターげんき教育相談課長

教育相談課長の楠山です。私からは「ICTを活用した不登校支援」についてご説明させていただきます。

まず1番目に、ICTを活用した不登校支援の概要、ア～エについて説明させていただきます。その後、実際のチャレンジ学級、あすテップの相

互のオンライン授業風景について、3分程度の動画をご覧ください。その後、本日来ている指導員の佐々木から、不登校児童・生徒のオンライン授業についての感想、課題などをご説明させていただきます。

ICT支援の3つの柱として、学習支援と学習評価、相談支援を考えております。

まず1点目の学習支援ですが、最終的な目標は、不登校児童・生徒が自宅から授業に参加できるオンライン授業を検討しております。ただ、すぐにオンライン授業、不登校児童・生徒に特化した授業というのはなかなか難しいので、後ほど段階的な手順についてもご説明させていただきます。

2番目の学習評価です。これは学校以外の居場所、自宅とかチャレンジ学級などの学習評価について、どういう評価ができるのか、これを校長会と今検討を始めようとしております。

最後に相談支援です。学校、スクールカウンセラーのオンライン相談、こちらについては今年度中に開始したいと考えております。また、こども支援センターげんきでやっている教育相談のオンライン教育相談につきましては、8月より開始させていただいております。

オンライン授業の手順です。最終的な目標は、自宅から学校の授業に参加できることです。ただ、9月はコロナの関係でオンライン授業を学校でやっておりました。不登校児童・生徒の25%が参加できたという声が出ておまして、校長会と今後協議して、今年度中には何らかの方向性を出したいと思います。まず、できることからということで、STEP1として、チャレンジ学級、あすテップの授業を相互にオンラインでできるように開始させていただいております。後ほど動画で確認いただきます。さらに、STEP2として、例えば学校の別室とチャレンジ学級をつないだ授業ができないかというのを検討して、最終的には学校の何らかの授業に参加できるようにしたいと考えております。

先ほどお話ししましたあすテップとチャレンジ学級の違いを簡単に説明させていただきます。

まず目的のところですが、あすテップについては学校内にありまして、学校と類似の環境の居場所として位置づけております。そのため、学校復帰を最大の目的としておらず、ここの中で完結して、第一に学校復帰ではなくて、ここで勉強してくださいねということを目的としております。また、あすテップは、そのように学校に準じていますので、登校時間をあらかじめ決めて、この時間に登校してくださいねとしています。それから、グラウンドとか体育館を共用するなど学校施設を活用しております。また、給食も実施しております。

チャレンジ学級は従来型の適応指導教室になっておりまして、学校復帰を目指した指導をしています。また、学校外にあることで、午後から来る子とか、午前中10時ぐらいからいらっしゃる子とか、いろいろなお子さんに対する対応もしておりまして、個別指導、コミュニケーション支援も行っております。あすテップは中学校対象ですが、チャレンジ学級は小学生専用教室も設置いたしておりますので、あすテップは、どちらかというと、学校施設に入ることに抵抗のないお子様が多いのかなと考えております。

先ほどお話ししましたオンライン授業を、左側の従来のチャレンジ学級に加えて、黄色で示したオンライン授業を追加いたしました。例えば月曜日の1時間目、従来の綾瀬のチャレンジ学級では、国語と英語をやっていますが、オンライン授業の時間割は、あすテップなでこの英語の授業となっております。ここの英語の授業にオンラインで参加することができます。最終的に、来年度からはいろいろな授業の選択肢を増やしていきたいと考えております。例えば、理科の先生がいないチャレンジ学級もあるので、他のチャレンジにいる理科の先生の授業を映して見るなど、通常の対面授業を補完する役割をオンライン授

業に求めていきたいと考えております。

また、児童・生徒の状況に応じて、自宅からも参加できるような形もできますので、そちらと併せて、例えば、数学の単元別の授業といったものを検討していきたいと考えております。

こちらは参考です。不登校支援におけるICTの活用実施計画の体系図になっております。

それでは、動画をよろしくお願いいたします。

〔動画開始〕

これは、あすテップなでこの英語の授業になります。こちらをチャレンジ学級の西新井・竹の塚・綾瀬に配信しております。教員の前に机がありまして、そこにカメラを置いております。板書をカメラで写して配信しているという状態になります。

これはチャレンジ学級の西新井教室になります。基本的に、パソコンを持ち帰って、チャレンジ学級に持ってきていただいております。ここの学級では全員持ってきている状態になります。パソコン上ではこのような授業を見ることが出来ます。少し画像が粗いですが、授業内容は確認できるようになっております。

これは、あすテップです。個別対応が必要なお子さんは、教員が横でフォローしながら授業をしています。

これはチャレンジ学級竹の塚です。割とみんなにぎやかな雰囲気を見てとっていただけるかと思います。

こちらはチャレンジ学級の綾瀬です。ここはみんなおとなしいので、静かに授業を聞いています。

以上が動画になります。

〔動画終了〕

本日は支援員が来ておりますので、感想や課題を説明させていただきます。

○佐々木あすテップ支援員

教育相談課不登校施策担当の佐々木と申します。あすテップに支援員として入っておりまして、

現在、あすテップ及びチャレンジ学級におけるオンライン授業の事前準備ですとか機器操作に関して担当させていただいております。今回、オンライン配信を実施してみてもの感想ですとか、見えてきた課題に関してお話しさせていただきます。

感想としましては、先ほど楠山課長からお話がありましたとおり、教科担当がおらず、一斉授業が実施できない教室にも配信を行うことができて、子どもたちの学習機会の拡充ですとか、より学校に近い環境での学習を展開できたように感じています。例えば、先ほど見ていただいた動画は、あすテップなどでこの英語の教科担当による英語の授業だったのですけれども、英語の教科担当がいない教室にも英語の授業を配信することができて、生徒からも「楽しかった」なんていう声も聞かれました。

次に、課題点についてお話しさせていただきます。主に3点ございます。

1点目は、双方向のコミュニケーションについてです。現状、オンライン参加者は、視聴がメインの受動的な学習体験となっています。先ほどの動画でも、生徒から「分からないところが聞けたらもっとよかった」なんていうコメントもありましたが、そういった生徒の声なども踏まえて、今後はチャット機能なども活用して双方向のやり取りに取り組んでいけたらと考えています。

2点目は、授業の連続性です。現状、授業配信は単発的に行っておりまして、授業の前後につながりがない状態になっています。あすテップですとかチャレンジ学級には、授業内容についていけないことだったり、あるいは見通しが持てないことに強い不安を感じる生徒さんもいらっしゃいますので、そういったことも踏まえて、翌年度からは、配信を行う時間割を年間で固定することによって、授業の連続性ですとか見通しを持たせて、また、Google Classroomのチャット機能なども活用して、授業の事前・事後のフォローをしたいと思っています。

3点目は、指導員のICTスキルの向上及び維持です。現状、端末ですとか機材の操作といったICTスキルを持つ指導員が限られています。それを踏まえて、指導員向けのマニュアルを作成しました。今後は課内研修なども実施して、指導員のICTスキルの向上にも取り組んでいけたらと考えております。

私からは以上です。ありがとうございました。

○近藤区長

それでは、ここまでのところ、特別支援教育について、そして不登校支援についてのICTの活用について、本当にかいつまんでご報告させていただきました。それぞれ委員の先生方からご質問やご意見があればまず伺いたいと思いますけれども、河本委員からでよろしいですか。

○河本教育委員

河本です。ご説明ありがとうございました。

まず、特別支援教室と不登校支援の説明からでしたが、どちらもこの先このまま活用していけば、様々な状況下において子どもたちに分け隔てなく、共通の学習が提供できるという点で大変うれしく思っています。

ただ、共通の課題として一番見えてくるのは、機器的なことではなく、これを使いこなす教員のスキルアップだと思います。

学校訪問時、先ほど話題に出た緊急事態宣言下でのオンライン学習を選んだお子さんに対する動画配信ではなく、小学校で実施された朝会から給食が始まるまでの時間をオンラインでつなげた事例について聞いてみました。

準備する時間がなく、先生たちは相当大変だったらしいのですが、非常に前向きに、「これでもできる、あれもできる、じゃあこうやってみよう、ああやってみよう」と、とにかく自宅にいる子どもたちを分け隔てなくつなげて授業と一緒に受けさせるという方針のもと、楽しんでやっていた

とのことです。

その結果として、オンライン授業を受けている子のうち、半数が登校に切り替えたという学校が多くなったのだと思います。

不登校支援にしても、同じ世代の人たちがいる授業風景を目にすること、聞くことで、少しでも学校に行ってみようかな、またはチャレンジ学級に行ってみようかな、あすテップに行ってみようかなというきっかけになるのではないのでしょうか。

自宅でのオンライン授業が可能になるのはもう少し先で、それが最終目標との話でしたが、早く現実にしてもらえればと思います。

それと、特別支援教室においては、その子の抱えている課題が一人一人違うということで、使う教材も異なります。

先ほどの話にあったように、たくさんのアプリがある中で、担当する先生がその子に適したものを選ぶという能力はこれからの話だと思います。

タブレットが宝の持ち腐れになってはいけなないので、積極的に先生たちが研修や情報交換を通じて、その子に合った活用をし、その子の抱えている問題を解消してほしいと思います。大きな期待をしています。

○近藤区長

ありがとうございます。1つご質問は、自宅への配信がいつ頃かということですが、目標としているのはいつ頃になるのかということをお答えいただけますか。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

自宅への授業配信は9月に実施しています。各学校の状況にもよりますが、やろうと思えばやれる状況です。今は学校対応になっています。

今後は、状況ごとの実施の可否について整理をしていきたいと思います。

今年度中には何らかの方向性をと考えていま

す。校長会と話す必要があり、すぐに「1日何時間やって」という話でもないので、そこは相談しながら早急に対応したいと思います。

○近藤区長

それこそ、求められているお子さんがいる学校とそうでない学校もあると思いますから、まず実態に即してということですね。区民の声にも、不登校だったのに、リモートで自宅から授業を受けられて本当に子どもが楽しそうだったなんていうご意見はたくさん頂いているんですね。ですから、そういったことができるお子さん、リモートを通じれば教室の状況に参加できるお子さんがいるのならば、それは考えていく必要があるのだらうと思います。

もう一つ、その子に合ったアプリを選べるかどうかも含めた、支援する、または指導する教職員のスキルアップについて、これはどちらにも課題として挙がっていたかと思いますが、まず門藤さんのほうはいかがですか。どのように育てていくかということと、また、その子どもに合ったアプリについては、どういうものが合うよというのは、げんきのほうでご相談いただければ先生のほうにご指導しているという話も前に聞いたことがありますけれども、その辺りも含めて、どのように研修してスキルアップを図っていくように計画されているのかということですが。

○門藤こども支援センターげんき支援管理課長

まず、アプリの件につきましては、これはげんきのほうで準備をして、個々に合ったアプリを一括して用意しようと考えております。また、今年度、30校に、子どもの指導計画をつくるためにシステムを導入しました。そのシステムを活用することによって、その子の特性にあった指導計画が作成できます。また、その特性に合わせて、指導教材はこういうものがありますと提供してくれるシステムを今年度導入しました。今後、この

システムの効果を検証して、来年度に生かしていきます。

この両方の方法で、個々に合わせたアプリを提供できればと考えております。

また、教員のスキルを向上させるためには、通常学級の教員も含めた、げんき主催の研修を充実させることが重要だと思っています。それから、支援管理課の財産として、令和2年度より10校の先生方が先行で授業実践していますので、その先生方を中心に、他の学校に派遣し、ICTを活用した授業作成のお手伝いをするということができるといいと考えております。

○近藤区長

ありがとうございました。今日は、集中力が途切れないで続いていますねですとか、書くのが苦手なお子さんが、キーボードを使うと参加できるようになるとかというプラスのところのご紹介がありましたけれども、10人が10人とも全てICTで問題が解決できるというわけではないということでもよろしいのでしょうか。やはりICTを入れても合わないお子さんもいるということは一定程度認識されているのか、その辺のところを聞かせていただけますか。

○門藤こども支援センターげんき支援管理課長

まず、ICTを活用しても合わないお子さんのケース。今、1人1台タブレットを用意しました。ところが、注意が散漫になりやすく、いろいろな事が気になるお子さんがいます。その場合、隣を見たら、何をやっているのか気になり、一つの事に集中できないお子さんがいます。逆効果になるケースもあるわけです。ですから、一人一人によって、必ずしも全てがICTを活用すると有効かというと、そうではない場合もあると考えております。

○近藤区長

ありがとうございました。

近藤先生、いかがでしょうか。

○近藤教育委員

今、区長と河本さんもおっしゃっていたように、みんながみんな配信した授業内容でうまくやっていけるかという、そうではないと思います。

ただ、私が予想していたよりも多くの子どもたちが、比較的抵抗なく受け止めており、現代の子どもは、私たちの世代よりもずっとなじんでいける要素を持っているのだと感じております。

ただ、やはり限界があって、先ほどもおっしゃっていましたが、双方向のやり取りをどうやってもっと有効にしていくかが課題です。

先ほど、教員サイドの技術指導というのがありましたけれども、生徒と一緒にその練習をしていくことも望ましいのではないかと思います。

双方向のやり取りに関する技術指導等に関して、こんなことを考えているということがあったら教えてください。

○近藤区長

楠山課長から先ほどちょっと出ましたけれども、双方向の工夫についてお願いします。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

双方向は相当難しいです。

誰も前にいなければ可能ですが、前に生徒がいる中でオンラインの子と双方向による授業を行うことは相当難しいです。校長会とも話をしながら進める必要があると考えます。

ずっと双方向でやり続けるのは難しいため、ポイントを絞り、例えば手を挙げるタイミングで中のお子さんを指してみるなど、通常の授業と同じように子どもと関わることで実施が可能になるのではないかと思います。

まずは、同じような授業を対面でやってみることが第一段階かなと思っております。

○近藤教育委員

ありがとうございます。

○近藤区長

小関先生、何かございますか。

○小関教育委員

10年ぐらい前ですが、私が特別支援固定級の校長をやっていたとき、特別支援教育あるいは不登校の子を登校させたり、勉強させるためには、デジタル機器の活用が必要であると考えていました。

当時から、通常学級の先生以上にデジタル機器を使っており、画像を撮ったり、コンピューターを使って自身で作成したものを映し出したりしていました。

私としては、もっと早くこのような準備をしておく必要があったと今さらながら思うのですが、先ほども話があったように、実際に動き出すには、お金の問題や人の問題など、クリアしなければいけないことがたくさんあり、急に先へは進められないと思います。

I C Tに関しては、通常学級もそうですが、特別支援と不登校に関しては最優先で進めていかなければならないと思っています。

去年も教育委員会の中で話したのですが、通常学級、特別支援、不登校のそれぞれの担当課がいろいろな準備をされていると思いますが、今は国でも大臣がいる状況です。

担当課がまとまって一つの方向に向かってやっていると、先に進めることができたとしても遅いのではないかと考えています。最優先で進めていただきたいのですが、どのように考えているのでしょうか。

次に、個別指導に関してです。教育政策課のほ

うで進めているeライブラリ、学力定着推進課のほうで進めているA Iドリルを今後入れていく予定だと聞いていますが、特別支援や不登校の子どもたちに配付されるタブレットへ早めに入れるべきだと思います。

これで全てが解決するわけではないと思いますが、その辺の準備はどの程度されているのでしょうか。

○近藤区長

分かりました。ありがとうございます。組織のことについては教育長のほうからお考えを。まだ今内部でもんでいる最中ですので、これで決定ということをお断りすることはできないのですが、教育委員会のほうからもご要望を頂いていますので、教育長のほうから、どんなふうに考えているのか。組織のことですね。

○大山教育長

今、小関先生がおっしゃるとおりで、子どもたちに1人1台のタブレット教育を進めていく専管組織が必要かなと考えています。またこれから組織の関係についてはご相談していくのですが、仮称ですけれども「I C T教育推進課」のような名前をつけまして、まずはその中でも、機器を、故障したりなくすといったこともありますので、機器を管理していくような係と、先ほど来出ております先生たちのスキルアップといったソフトの部分を進めていく係ということで、そこには指導主事も配置して、各学校とやり取りをしながらというようなところで、専管組織をつくりたいと考えています。機器の管理とソフト部分の管理をしていく組織をつくり、ここが中心になって各学校にいろいろな先生への研修等を行っていただければいいなというところで今考えているところでございます。

○近藤区長

できれば新年度、4年4月からと考えております。

それと、楠山課長、特別支援ですとか不登校のお子さんたちのタブレットの中にeライブラリやA Iドリルを入れるという内容についてお願いします。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

実はeライブラリはもう入っております。

学校で使用するのと同じような形で、学校の先生が見られるようにしております。A Iドリルにつきましても、来年度導入予定のものを、不登校児童・生徒が使えるようになると、聞いております。

○荒井教育指導部長

若干補足をよろしいですか。A Iドリルですけれども、タブレットの中に何かが入るというよりは、クラウド上で行うものですので、I Dとパスワードが配布されれば、どのお子さんでも自分のI DでA Iドリルにアクセスして、自分の学習履歴がそこにたまっていくというような、そうした形で学習が進められるものでございます。

○近藤区長

という指導はしていただいているんですかね、不登校のお子さんたちに対して。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

eライブラリにつきましては、チャレンジ学級でも当然やっております。

チャレンジ学級に関わっていない不登校のお子さん、学校の先生方宛てに自宅学習はこうにしてくださいという通知も出しています。通知を出しただけではなかなか分からないので、指導主事の個別相談もしています。

学習履歴は全て学校で見れますので、不登校の

児童・生徒のお子さんに学習指導をする際は、

「この学年のこの分をやって、学校のほうでそれを確認する」といった形の指導を8月頃から実施するようにお願いしています。

随時進捗状況を確認しながら、アドバイスしていけたらと考えております。

○近藤区長

今全く学校に来ていないお子さんにもタブレットは行き渡っているということでよろしいんですね。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

はい。

○近藤区長

それをどのように活用しているかどうかという履歴まではまだ確認していないということでですね。ありがとうございます。

早川先生、いかがですか。

○早川教育委員

教育委員の早川です。

先日の校長会で、少しショックだったのですが、すごく良かった点がありました。

不登校の方に関して、「今まで顔も見えず、安否さえ分からない状態だったが、確認が取れて良かった」という意見が校長先生から出ました。そういう点だけでもすばらしいことだと思いました。

次に、先ほどの映像にも出ていたあすテップ等についてです。今後一層、オーダーメイド化、個人化していくような印象を受けました。

不登校の方やあすテップの方たちのゴールはどこになるのでしょうか。

普通の学校に戻ることを目標にするのか。普通の学校に戻った後にダメージを受けた場合は、あすテップ等に戻るようにするのか。

また、チャレンジ学級やあすテップに通うの方の中には、コミュニケーションや対人関係は苦手だが、他の才能がある方もいると思います。それを見つけることをゴールにするのか。

先ほどの先生の教育にもつながることかもしれませんが、ゴールはどこになるのでしょうか。

○近藤区長

いかがですかね。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

先ほど、チャレンジ学級は学校復帰が目標と言いましたけれども、実際には、そこを第一目標にしておられません。

まずは、学習定着、集団活動、コミュニケーションをとることができることを目標にしております。チャレンジ学級のお子さんで多いのは、学年の切替えのときに学校に戻って、翌年はチャレンジ学級に来なかったというケースです。目標は学校復帰と言いつつも、それだけではなく、社会的自立といったところを重視しております。

ほかの才能を見つけることにつきましては、なかなか難しいですが、いろいろな体験活動を通じてきっかけになれば良いと思っています。

○近藤区長

チャレンジは分かりました。あすテップについての到達点というのはどういうふうに考えていますか。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

あすテップにつきましても、そもそも学校には戻らなくていいと言っております。

あすテップの中で学力テスト等もやっておりますし、そのまま卒業した方も去年いらっしゃいます。高校に入った方もいらっしゃいます。一方で、学校に戻りたいと言って戻った方もいらっしゃいます。

そこは強制せず、戻れるタイミングがあれば戻っていいという形を取っております。

○近藤区長

これもこの前、議会からご質問があつて、答弁をしたのですけれども、親御さんは在籍校に戻ってほしいという希望を持っている。ところが、ご本人は、ここでいいんだという。保護者とご自身の意思が違うところにあるということで、その辺難しいねという話は出ていました。ですので、ご本人と保護者の気持ちがなかなか一つにならないということがありましたね。

恐れ入ります。ここで次のトピック、「夏季休業期間中における持ち帰り用端末活用の成果と課題」というところでございます。では、森課長のほうからお願いします。

○森教育政策課長

教育政策課長の森でございます。よろしくお願いいたします。

資料3の3ページをご覧ください。

夏季休業期間中の持ち帰り端末活用調査結果でございます。この調査は、7月30日までにChromebookの整備が完了した小学校28校、中学校35校を対象に実施いたしました。これらの対象校のうち、中学校は全ての学校が持ち帰りを実施いたしました。しかし、小学校については3校のみが持ち帰りを実施いたしましたが、大半の小学校はタブレット端末の整備が夏休み直前または休業中に配備されたということで、児童への指導や準備が不足して、持ち帰りができなかったという結果となっております。

4ページをご覧ください。タブレット端末を自宅に持ち帰らせて、各校が取り寄せた課題の内容になります。右側の棒グラフをご覧ください。お分かりのとおり、eライブラリなど、問題を解かせる課題をはじめ、調べ学習やレポート作成あるいは高校訪問の報告に取り組ませる学校が

多く見受けられました。一方、タブレット端末を活用した課題を出さなかったという中学校は、一番下にあるとおり5校あったということも明らかになりました。

5ページをご覧ください。各校で与えた課題についての取組状況ですけれども、大半の児童・生徒は、タブレット端末を活用して問題なく取り組んだそうです。中には宿題の範囲を超えて取り組む生徒も多くいたという報告を受けています。

また、②にありますとおり、一部の自由課題としたものについては、あまり取り組めていなかったというような傾向もあったようでございます。

また、データから分析しますと、④のように、持ち帰りを実施している学校あるいは課題を与えている学校のほうがより活用が進んでいるという傾向が分かりました。

これにつきましては、6ページをご覧ください。左側のグラフは、夏季休業期間中における1人当たりのGoogleログイン回数を示しています。持ち帰りを実施した小学校は1人当たり11.2回ログインしたのに対して、持ち帰りを実施しなかった学校については1人当たり2回と非常に少ない傾向がありました。また、その下のオレンジの棒グラフですけれども、課題を与えた中学校は1人当たり5.6回アクセスしておりますけれども、課題を与えなかった中学校では、その半分以下の2.5回となっています。

また、右側のグラフをご覧ください。右側のグラフは、夏季休業期間中におけるeライブラリのドリルを解いた1人当たりの回数ですが、持ち帰りを実施した小学校3校は1人当たり45.6回ドリルを解いていますが、持ち帰りを実施しなかった小学校は1人当たり4.9回と大きく差がついてございます。また、その下の中学校では、eライブラリを課題とした学校は1人当たり15.9回だったのに対して、eライブラリを課題としなかった学校では2.5回と、やはり活用回数が少ない傾向があるということが分かりました。

また、その表のそれぞれの下に赤字で示してありますけれども、活用が進んでいる学校もあれば、全く活用していないという残念な結果が明らかになりました。

7ページにお進みください。今回の主な課題や問題点を取り上げました。右側にはその改善方策を記してあります。

まず、課題・問題点の①ですけれども、課題の準備の時間を十分に確保できず、児童・生徒への説明や指導も不足していたことが挙げられています。次の持ち帰りのときには早期に準備を進めて、事前説明や指導時間を十分に取るといった対応をしてもらいたいと思います。

次に、課題・問題点の②に挙げられていましたのは、家庭での操作をフォローする必要があったということでございます。今回、ご家庭の保護者からのWi-Fiの接続やアプリケーションについての問合せに対応することが学校の負担になったということが多く聞かれました。今後はさらに分かりやすいマニュアルを整備して、ホームページ等でも詳しい情報を家庭に向けて発信していきたいと考えてございます。

次に、課題・問題点の③です。現在、Windows端末、LTE型のChromebook、そして普通のChromebookの3種類が混合しているため、持ち帰りのできないWindows端末を割り当てし直す必要が生じたり、あるいは環境が同一でないので、課題の選定が限定される問題があったとのことです。これについては、次回の機器の更新に向けて、機器の統一を検討する必要があると考えてございます。

次の④ですけれども、端末で課題を提示しても、児童・生徒側がきちんと確認しているとは限らず、連絡が確実に伝わらないということでした。この点については、児童・生徒が端末にログインする習慣を定着させるということで解決できると考えています。

8ページ、9ページには、今ご説明した課題と

か問題の詳細な項目が示されていますので、後ほどお目通しいただければと思います。

飛びまして、10ページをお願いします。これまでお話しした調査結果から、持ち帰り端末活用の取組全体を通じて分かったことをまとめてみたものです。

まず、児童・生徒の取組についてですけれども、学校からの指示や課題があれば端末を利用するのですが、指示や課題がなければ活用しない傾向があるということが明らかになりました。また、端末を使って何をするのかを明らかにした上で持ち帰らせることが必要だということが分かりました。

次に、教員による準備についてです。今回の持ち帰りに当たっては、課題の作成や提出方法の確立のための準備時間を十分に確保できなかったことが課題となりました。今後は通常授業に取り入れたり、早期に計画的に準備に取り組む必要があると言えます。

11ページです。

家庭へのサポートについてです。タブレットを持ち帰るに当たって、家庭Wi-Fiへの接続方法やeライブラリへのログイン、Google Meetへの参加についての問合せが多く、学校が対応に追われたということが分かりました。先ほどお話ししましたが、やはりマニュアルを充実させて、区のホームページにも記載していることを含めて周知をしていきたいと考えています。

最後に、端末についてです。タブレットの3機種、つまり、Windows 端末、LTE 端末、普通のChromebook が混在していることによって、割り当ての再調整あるいは使用方法の説明が煩雑だとの声が多いことが分かりました。そのため、今後は、機種の統一も見据えた検討が必要であるということで進めていきたいと考えてございます。また、持ち帰り用の端末が全員分ありませんので、Windows 端末の持ち帰りのための設定変更を12月上旬までに確実に完了させる必要があります。

さらには、児童・生徒用の予備機や教員用の端末が不足しており、故障時の対応や教員の業務に支障を来している学校があります。対応を考えてまいりたいと思います。

今回の調査結果のデータを生かして、12月以降の全員のタブレットの持ち帰りを実施していきたいと今のところ考えてございます。

私からの説明は以上でございます。

○近藤区長

タブレットの持ち帰りですけれども、他区では何も課題がない日でも、通常、ウィークデーも持ち帰っているような学校があつて、何も使わずに、重い思いをして翌日持って来るといったような話も聞いていますが、当面、足立区では、長期の休業のときに持ち帰りを考えている。普通の日常では学校に置くということが基本ということによってよろしいのでしょうか。

○森教育政策課長

今考えておりますのは、長期休業中には必ず持ち帰らせる。それから、日常については、必要に応じて持ち帰ってもらう。例えば、宿題として課題を与えることが必要だなとか、調べ学習をしてきてねというときには必要に応じて持ち帰らせるということが基本になるかなと考えています。ただ、学校によっては、通常持ち帰らせたい学校もありますし、持ち帰るのは非常に重くて大変だから、家のパソコン環境を使って、IDを使った宿題をやらせるという学校も聞いておりますので、いろいろなパターンが足立区では考えられるかなと思っています。

○近藤区長

うちの学校はどうしたらいいかというふうにお悩みの校長先生もいると思いますので、こういう学校があるとか、こういうふうになっている学校があるという情報については逐次校長会等でお

知らせしていったって、横展開を図っていく、見える化をしていくということが非常に重要なのではないかなと思いますから、よろしくお願いします。

○森教育政策課長

はい。

○近藤区長

端末について、冒頭私もちょっとお話ししましたが、幾つかポイントが出ております。これについては、仮に直近に Chromebook を購入したとしても、現場に配備できるのは最短でいつ頃になるというふうな見込みなのでしょうか。

○荒井教育指導部長

今のところは、来年の9月ぐらい、夏休み明けぐらいになるのではないかと想定しています。

○近藤区長

それは、仮にいつ買ったとして。

○荒井教育指導部長

今年度中にお話を進めた上でということです。来年の4月から動き始めて、9月ぐらいになる見込みです。

○近藤区長

ですから、買ったとしても、現場で使っていたって、混乱が回避できるようになるには1年弱の時間がかかるということで、本当に申し訳ない。ただ、このままいくと、今の Windows のリース期間が令和6年度までだったか。

○大山教育長

6年の9月までです。

○近藤区長

ということなので、当初は何とかそこまでの

いでほしいというお話でしたけれども、まだ今年度の中でこんな混乱を3年間引っ張ることは難しいだろうというような判断は今しております。立ち上げに5分ぐらい Chromebook と Windows では差があったり、うちの副区長の長谷川が現場に行って、生徒さんが非常に右往左往している状況を見て、Windows が割り当てられたお子さんは外れと、何か自分が差別されたように感じるお子さんもいるというような話も出ていますので、やはりこれはかなり財政的には厳しい判断なのですけれども、致し方ないというか、なるべく現場に沿ってと考えております。

持ち帰り用端末が云々ということとはともかくとして、教職員の先生方に対しての端末についても1人1台は確保していきたいということで、今それも予算計上の要望を受けているというところですので、端末についての課題については一定程度、時間はかかっても最短で解消していけるようにと考えております。

また、持ち帰りの夏休みを過ぎて、今度、夏休み以降の様々な授業展開で一気に広い川をぽんと渡ったかのような感じもありますけれども、今の夏休みの対応も含めて何かご質問があれば。通常の学級についてのICTの活用ということになるかと思いますが。

私は1つ先生方にお尋ねしたかったのは、結局ここで、個に応じた、どこがつまずきかということをも自分でチェックしながら進めるAIドリルというものが入ることによって、例えば数学の民間の業者に委託している事業については取りやめて、AIドリルのほうにスイッチしていくという方向を教育委員会は持っているようなのですけれども、そういう方向でよろしいかどうかということ、皆さん方、ご意見を頂けたらと思うんですね。結局、幾ら人数を減らしていても一対一で教えられるわけではないので、仮にこれが35人学級になったとしても、その中で理解度にはかなりばらつきが出ていて、きめの細かい、個

に応じた指導とは言ってみたものの、できることには限りがあるということになると、民間の企業に委託した補習の講座よりもA I ドリルのほうが、それぞれ個別に応じて、自分自身でつまづきを確認しながら進めるのではないかというような考え方と、かなりの投資をしますので、どこかでリストラクチャリングしていかなければならないというような教育委員会のお考えかと思うのですけれども、そこも含めて少しご意見を伺えたらと思います。

何か質問があれば、どうぞ。ご意見でも結構です。

○河本教育委員

先ほどのA I ドリルの件ですが、現在やっている補習的かつ外部委託の数チャレに取って代わるというイメージでA I ドリルの導入を考えていることや、通常授業や自学自習でも使えるようなものが望ましいという話は聞いています。

先日、モデル導入をしている両者を見させていただきました。学校での授業や補習で使えて、自学自習でも使えるということでした。

しかも、自分のできないところまでA I ドリルが遡るため、どこでつまづいたのかが分かり、振り返りの機能もあるということで、すごく優れたドリルだなと思いました。

私が、A I ドリルのほうが良いのではないかと思うのは数学に限っての話です。

今回、コロナ禍で中1夏季勉強合宿が中止になってしまいました。中1合宿でA I ドリルが活用できれば、全校開催が可能となり、参加できる子がものすごく増えると思います。

私は、基礎基本の確立のためにA I ドリルを全員に導入することに賛成です。

○近藤区長

ありがとうございます。

近藤先生、いかがですか。

○近藤教育委員

私は、A I ドリルがどういった機能を持っているのかがまだよく分かっておりません。

数学なら数学、算数なら算数のいろいろな課題をみんな共通して受けられるようなものなのでしょうか。

また、問題を解く中で質問ができたり、先生から指示を出すことができるのでしょうか。どんな機能を持っているのかを教えてください。

○大山教育長

問題を解いていただいて、掛け算だったり足し算だったり解いていただいて、それが合っていれば次の問題に進めるけれども、間違っていると、間違った段階で、その間違いの元を機械のほうで判断して、それより易しい問題、つまづきを解決できるような問題にだんだんと遡って行って、その間違いの元を解消していくというような、問題を解いて自分の間違いを発見していく、解消していくという内容です。

○近藤教育委員

ありがとうございます。

問題を解きながらクラスでシェアしたり、質問が出たら先生が個人やクラス全員に答えたりできるようなやり取りの機能を備えていると良いと思いました。

どの科目でも必要なときには映像を流したり、シェアしたり、みんなから短い感想のレポートを出すことができ、先生がそれに対して個別の指導や全体に対するコメントができる機能を持っていると良いと思います。

以前のこの会議で、何かプログラムを導入するとおっしゃっていたと思うのですが、あれはどうなっているのでしょうか。

○近藤区長

この会でですか。

○近藤教育委員

はい。私が提案して、区長が既にやっていますというふうにおっしゃっていたと思うのですが。

○河本教育委員

Google の方の話です。

○近藤教育委員

そうです。

○荒井教育指導部長

それとA I ドリルはまたちょっと違う機能になります。

A I ドリルに頼りっきりということではなく、対面の授業は当然にあって、そこでの質疑応答もあります。

そこで分からなかったことを、A I ドリルを使ってもう一回振り返ります。間違えれば解説が出てきますので、それを見てもう一回チャレンジし、駄目ならさらに易しい問題というように機械のほうでやってくれます。

これでも分からなければ、また先生に質問をするという循環の中で子どもたちが学んでいく、そのような活用方法を考えていきたいと思っています。

○近藤教育委員

そうですね。A I ドリルがどのレベルのものなのかというのを知りたかったので。分かりました。

○森教育政策課長

補足です。先生がおっしゃったのは、Google の一つのアプリに Classroom というものがあるのですが、その一つの機能で、掲示板のようなものがあるのです。そこに先生が宿題を出しましたというと、子どもたちがそれを見て、質問を入力するとそれがみんなで見られるとか、そう

いう機能は今でもすごく活用されています。結構人気で、使う先生方はすごくたくさん使って、今回の持ち帰りの授業のときも、あるいはリモートの学習のときも結構使われていたと聞いています。

○近藤教育委員

A I ドリルにそれがついているのですね。

○森教育政策課長

それはA I ドリルとは違います。今のはGoogle Chrome のアプリの話ですので、A I ドリルとはちょっと違います。

○近藤教育委員

別のものでもそういったものがあれば、先ほどどなたかがおっしゃっていた、先生の指示が通りにくいということはありません。

必ず、毎日家に帰ったら Google のここを見なさいとなれば、課題がチェックされ、子どもたちの取りこぼしがなくなると思います。そんなことを思いました。分かりました。

○近藤区長

ありがとうございます。

それでは、小関先生、お願いいたします。

○小関教育委員

A I ドリルの導入に関しては大賛成です。個別最適な学びに繋がります。

それと、先ほど来出ていますように、協働的な学びも必要だと考えます。

個別最適な学びに関して、A I ドリルは本当に最適な道具であり、素晴らしいものであると、この間見て思いました。

私も元数学の教員なので、数学の教科に関してはとても良いと思っています。

ただ、都立の試験は5教科です。理科や社会に

も興味を持っており、そちらのほうで頑張る子もいます。

教科については、5教科入っているんですよね。

○荒井教育指導部長

5教科です。

○小関教育委員

5教科入っているということなので、ぜひそれは活用してもらいたいと思っています。

○近藤区長

ありがとうございました。

早川先生、いかがですか。

○早川教育委員

私はA I ドリルについて、結論としては大賛成です。どんどん進めたら良いと思います。

ただ、このようなI C Tツールを使って一番問題になるのは、自分のペースでできる反面、相手の気持ちを考えるという能力が極端に欠けてくることです。

ですから、I C Tツールで勉強の苦手部分を克服し、その一方で道徳や運動会等の共同作業を通じて相手の気持ちを考えることを学ぶ必要があると思いました。

あすテップやチャレンジ学級については、今後、需要が増えて人が必要になると思います。そこはちょっと心配しています。

○近藤区長

人材のほうはどうですか。

○楠山こども支援センターげんき教育相談課長

あすテップは、現在、あすテップなでしこというところが定員20名のところ16名です。はなほの方はまだ1桁台で、6名ぐらいなのですけども、今のところ何とか、指導員6名で対応して

おります。ですが、もしこれがもっと増えてくれば、対応していかないといけないなと思います。現状は何とか指導員6名で対応できるような形になっております。

○近藤区長

そろそろ時間が来ておりますので、機器は、ちょっと時間はかかりますが、Chromebook に統一させていただく形で進めていければ。ただ、機器はあっても、それをどうやって使いこなしていくのかということがこれから非常に重要だと思いますので、ぜひまた様々な取組例を先生方にも見ていただいて、横展開していけるように。すごく進んでいる学校と、なかなか厳しい学校の二極化になってしまうと、一番影響を受けるのは子どもになってきますから、平均のラインをなるべく上げられるようにはしていきたいと考えておりますので。それについてはどうですか。最後、教育長。

○大山教育長

今、区長からお話いただいたとおり、各学校の中でも、若手の方は非常にたけているけれども、年配の方はなかなか難しいということもあります。ですので、今考えているのは、各学校に今、週に1回、I C T支援員さんが行っていますけれども、これを何とか2.5回。2回は行ってもらって、0.5回分を規模の大きい学校や、上手く活用のできていない学校なんかに行けるような形にできればと思います。まずは本当に先生方に使いこなしていただけるような環境を、物理的な環境ももちろんなのですが、スキル面での環境も整えていきたいということで、これもお金のかかる話なのですが、要望させていただいているという状況でございます。

○近藤区長

東京都からの情報で、来年度の都立高校の1年

生から保護者にタブレットを1台買って持つてこさせるようにということにするようです。そうしますと、大体1台10万円ぐらいじゃないかと都は言っていて、経済的に厳しいご家庭についてはどうするのかということを、まだ具体的な都のお考えは示されていないのです。ですから、それによって、区としても上乗せをする必要があるのかないのかというようなことですね。それと、工業系ではまたChromebookではちょっとスペックが足りなくて、もう少しテクニカルな技術を持つて来てくれないと困るというようなお話も漏れ聞こえてきています。ですから、こういう高校ではこういう使いこなす能力が必要だというようなことも事前に言っておいていただかないと、足立区から来た子は最初からつまずいちゃうとかという話になってしまうと困るので、都としても、都立高校についてきちっとした一定の考え方、スタンダードというものをお示ししていただくと、こういう学校に進む子にはこういう支援をしていかなきゃならないんだということを中学校の段階から先生方も知ることができるんじゃないかというふうにお話はしているのですけれども、なかなか東京都のほうも思ったような動きをしてくださらないことがあって。ですから、タブレットの対応というのは小学校、中学校で終わらずに、いよいよ来年度から高校でも入ってまいりますので、ここでもまた学びというのが途切れないようにしていかなければいけないなということを私どもも非常に強く感じておりますので、ぜひこれからもよろしくご指導いただきますようお願いいたします。

皆さん方のほうからよろしいですか。

では、これで。ありがとうございました。

○伊東政策経営課長

本日はいろいろありがとうございました。

本日の会議は以上で終了とさせていただきます。ありがとうございました。